

新大工町ザ・くんち

さあ本番！最高の奉納へ準備万端

諏訪神社の秋の例大祭、長崎くんちは10月7日午前5時、諏訪神社丸馬場から打ち上げられる火花を合図に、3日間にわたる行事が幕を開けます。新大工町の詩舞・曳壇尻の出番です。



田上富久市長や上田恵三商工会議所会頭らが、くんち踊町の稽古場を訪れる「長崎くんち踊町激励訪問」が9日9日夜、新大工町商店街の町事務所前でありました。一行が到着すると、奉賛会役員や囃子の子供たち、舞人、吟士、根曳衆らが曳壇尻の前に整列して御出迎え。田上市長らが「本番では新大工町が一つになった姿を見せて欲しい」などと挨拶したのに対し、井上正道・奉賛会長は「くんちは町にとって、7年に一度の最大のイベント。最高の奉納を果たしたい」などと応えました。

日本中が戦時体制に傾いていく世相を反映して「剣舞」奉納の町は十三町があり、なかでも剣舞の町と云われた新大工町の少年剣舞は大好評でした。
くんちの華・少年剣舞
大正五年十月九日付の東洋日の出新聞は、「四名の少年剣舞師は後鉢巻、錦欄の裁付姿凛々しく練り込む。吟声は例の平野君にてメガホンで朗々と吹き込む拍手喝采急激の如く剣舞三番の後長坂連より「平野出せ」の聲

盛んに起こる。代理を出したけれど一向以て承知せず遂に平野君を引張り出す、平野君は高山彦九郎「我を人と思し召しや」云々の和歌でお茶を濁して長坂連を納得させる」と報じました。この「剣舞」奉納は敗戦で姿を消しました。それから半世紀、壇尻の奉納だけでは寂しいと剣

新聞記事に見る新大工町のくんち(下)
「剣舞」から「詩舞」へ
奉賛会顧問 山口康平

舞復活の気運が高まり、女性参加の演じ物も模索し、剣でなく扇を用いて舞う「詩舞」の奉納が決定しました。
モツテコイの大合唱
平成六年に初めての詩舞奉納。平成二十年十月八日付の長崎新聞は「白い着物にはかま姿、長い髪を一本に結った女性十人が出

続いて詩舞の舞人たちが稽古の成果を、詩吟に合わせた流麗な舞で披露。曳壇尻も息の合った囃子と気合のこもった掛け声、力強い曳き回しを披露しました。
◇ ◇ ◇
9月12日夜に諏訪神社で最後の場所踏みを終えた根曳衆は本番に向けた調整を続ける一方で、本番衣



装の着付け講習に臨むなど、万端の準備を進めています。
今回、添根曳采振を務める4人は「ここに来て根曳と囃子がびつたりまとまった。本番が楽しみ」(新永耕三さん)。「家族で出場する。曳壇尻を子供達に引き継ぐために盛りあげたい」(新永晃弘さん)。「新大工町の男気と心意気を若い人達に伝えたい」(平井栄一さん)。「本番で得られる不思議なパワーに乗って、全力を尽くす」(児島正吾さん)など気合いいっぱい。
一方、詩舞は23日、本番と同じ化粧、衣装に身を包んだ舞人2人を交え、本番リハールを兼ねた稽古に汗を流しました(写真)。
2人は、プロの手による入念な化粧に「いよいよ本番だな、と感じた」(原佳織さん)。「ふだんの稽古とは違う緊張感があった」(乃美優菜さん)などと話していました。

演じた詩舞。手にした扇子を滑らかに操り『祝賀の詩』を舞うと観衆は思わずうっとり。踊り子が幕の中に姿を隠すと会場は「モツテコイ」の大合唱。応えて「坂本龍馬を思う」を披露、節目節目の「決め」に惜しみない拍手がおくられた」と報道。
四回目の奉納ですが回を重ねるにつれ、大勢の方から「新大工町の詩舞はよかね」と大評判です。今年の奉納も益々の評判を上げられることを期待しています。

新大工町・「くんち」Q&A

新大工町が奉納するのは、傘鉾と詩舞・曳壇尻です。奉納を存分に楽しんでいただくために、演し物についてのQ&Aをお届けします。

● 奈良・春日大社に縁が深い？

新大工町の傘鉾、曳壇尻は春日大社にちなむ意匠で飾られています。これは新大工町が、春日大社の式年造替をつかさどっていた春日座大工という工匠集団と、何らかの縁があったものと推測されます。

春日大社によると、奈良の社寺を支える大勢の大工の中で最も格の高いのが春日座大工16人で、彼らは奈良中の

● 曳壇尻と川船はどう違う？

ダンジリとは、祭礼に使う屋根の付いた方形の山車（だし）のことで、船形の川船とは違います。壇尻は中で囃子を奏でながら曳き回し、じつくり聴いてもらうのが本来の姿です。

明治から大正時代にかけて12カ町を数えたダンジリの奉納も、現在では新大工町だけになっています。

今回、囃子の要である大太鼓を約100年ぶりに新調し、一回り大きくなりました。「太鼓集団鼓舞龍」に所属する「蛇紅太鼓」の指南役が、新大工



町のために新曲「護神太鼓」を作曲、くんち本番の「モツテコイ」のときに披露する予定です。大太鼓と根曳衆の掛け声の競演を、存分にお楽しみください。

◇◇ 曳壇尻は、以前に新調しました。その際、三社紋については1916年(大正5年)に製作した刺繍の技術的価値を尊重し、補修して後世に引き継ぐことになりました。

● 傘鉾の意匠も春日大社？

傘鉾は町の象徴であり、飾りは町の

大工の棟梁でもあったそうです。春日大社はいわば大工の神様だったとも言われています。新大工町はもともと大工職人の町でしたから、奈良



由来や奉納する演し物の縁起などを映しています。新大工町の傘鉾の飾りは、紅葉の中に金燈籠(春日燈籠)を配し、輪は注連縄です。垂は正絹両練固地織薄茶地固流紋に、諏訪、住吉、森崎の三社の御紋の金糸縫いで、2001年(平成13年)

蠟引きの紅葉に金色の燈籠は、朝日に映えて眩いばかりにきらめきます。新大工町の傘鉾は、曳壇尻とともに、春日大社に因んだ意匠でまとめられているのです。

● 詩舞の奉納は新大工町だけ？

詩舞は、漢詩や和歌などに節(旋律)をつけて詠う詩吟に合わせて、詩の世界を表現します。剣舞から生まれた舞で、刀の代わりに扇を用います。

剣舞に比べて柔らかな振りも表現できるのが特徴です。新大工町は1901年(明治34年)、曳壇尻とともに初めて少年剣舞を奉納しました。

1951年(昭和26年)を最後に剣舞の奉納は途絶えましたが、1994年(平成6年)に剛柔、硬軟のいずれの表現もできる詩舞を初めて奉納することになりました。



くんち本番では、前頭苑穂さんの指導の下、若い女性光沢のある白い着物に金糸・銀糸であしらった袴姿で、鶴洲流

長崎吟詠会の皆さんの吟に合わせて、一糸乱れぬ舞を奉納します。

今回は、これまでの「祝賀の詞」「坂本龍馬を思う」のほかに、奈良・春日に因んだ「天の原」も披露する予定です。